

6. 培養する時は、バイアル瓶の蓋を緩めておいてください。
(CO₂ ガスの発生があり、コロニーの色調が変わって判定しにくくなるため。)
7. 色判定をする場合は、コロニー数同様、恒温槽で正確に 48 時間 (±3 時間) 培養して、直ちに色判定してください。
但し、コロニー数のみの培養には恒温槽 (37℃) がなくても可能です。
室温でのコロニー培養時間の目安……夏期 3～5 日、冬期 5～7 日
8. 使用後のバイアル瓶および綿棒は、医療用産業廃棄物として処理してください。
9. カンジダ属の菌種決定には別途、同定検査を実施してください。
10. 使用期限は冷蔵庫保管で製造日より 2 年間です。(バーコード上部に表示)

Q7：検体の塗布後、バイアル瓶を立てる理由は？

A7：寒天の凝固時に析出した凝固液が、斜面培地に塗布・形成されたコロニーを洗い流すからです。

Q8：色判定は正確に 37℃の恒温槽で 48 時間後でないといけない理由は？

A8：カンジダ菌がまったく存在しない場合は、色の経時的変化はありませんが、本来陰性であるはずの 10² 以下の菌数でもカンジダ菌が存在すると、48 時間以上では経時的に酸を産生して酸性になり、色が黄色に変わってくるからです。一方、48 時間以内であれば 10³ 以上の菌数でもコロニーが出現しても酸の産生が少なく、色変化が起こらないからです。

Q9：カンジダディテクターの特異性について

A9：本培地では、口腔常在菌のグラム陽性菌やグラム陰性菌などの雑菌は、一定の菌数範囲内 (10⁵ CFU / mL 以下) では発育・反応はしません。

しかしながら临床上、一定菌数以上になった場合に発育・反応してくる細菌として、*Pseudomonas aeruginosa* (緑膿菌) や *Serratia marcescens* (霊菌) などがあり、培地の色を緑膿菌は紫色 (pH が上がるため) に、霊菌は黄色 (pH が下がるため) に変化させることがあります。その他の菌は、発育してもコロニーの性状は点状の小円形ないしは不整形で、ほとんど培地の色変化はいたしません。

真菌と細菌の見分け方は、真菌のコロニーは丸い形のまま大きくなるのに対し、細菌のコロニーは大きくなると形が崩れる (ベチャとした形になる) ことで判別できます。

Q10：カンジダ菌の菌数と臨床症状について

A10：カンジダ菌は、口腔常在菌であり、唾液、口腔粘膜より検出されますが、菌数と臨床症状とが相関することが報告されています。

Renner ら (*Oral Surg.*47:323-328 1979) は、口蓋部粘膜よりサンプリングして 10⁴ ~ 10⁶ の菌数があれば、臨床的に何らかの対応が必要であると述べています。

また、Epstein ら (*J.Clin.Microbiol.*12:475-476 1980) は、唾液中のカンジダアルビカンスを調べ 400CFU / mL を越えると、口腔カンジダ症が発現しやすいと報告しています。

これらのことより、カンジダディテクターは培養後の菌数が 10³ 個で擬陽性、10⁴ 以上で陽性としていますので、臨床症状をかなり客観的に反映しています。

Q11：保険請求について

A11：口腔カンジダ症診断のためにカンジダ簡易培養検査をすることによって、簡易培養検査 (60 点；医科点数表 D018 の 6) と、微生物学的検査判断料 (150 点；医科点数表 D026 の 6) の保険請求ができます。

なお、本内容は、平成 22 年厚生労働省告示第 69 号に基づきます。保険に関する規約は、告示等により変更されることがありますので、最新の情報にご注意くださいますようお願いいたします。



KAMEMIZU CHEM.IND.CO.,LTD.

亀水化学工業株式会社 フリーダイヤル 0120-267-720 <http://kamemizu.co.jp>